

# 講演会要旨

## 1. 演 題：「物語テキストの政治学」

講演者：兵藤裕己（学習院大学文学部教授）

開催日：7月6日（金）18：00～19：30

会 場：17号館 216室

共同研究グループ「声の文化」では、外部講師として『平家物語』研究の第一人者兵藤裕己氏をお招きし、語り物文芸の「声」について講演をお願いした。講演は詳細なレジュメとパワーポイントを用いて行われ、当初は社会的に恵まれない地位にあった盲目の琵琶法師による語り物文芸であったはずの『平家物語』が、テキストとして文字化されることで「正本」として権威化され、権力者の支配の道具となるばかりか、その権力を正統化し権威付ける文化資産にまで高められてしまう皮肉な過程を、歴史的に跡付けようとするものであった。文字以前の「声」と、それを「文字」化する行為との対立葛藤を通して、中世の語り物文芸を批判的に継受し、解明していこうとする講演者の研究姿勢を鮮やかに浮かび上がらせる講演内容であった。中世の語り物文芸だけでなく、兵藤氏には明治期の浪花節語りの「声」が、国民統合の具として利用され変容していく過程を論じた名著『「声」の国民国家—浪花節が創る近代日本』があり、その問題意識は、識字率 100% に近い現在にあって無縁な問題ではないことが強調された。

当日の参加者は、共同研究グループのメンバーだけでなく、大学院生など 30 名ほどが集まり、講演後の質疑応答も積極的になされて、講演会は盛況のうちに終了した。

（文責 深澤徹）

## 2. 演 題：「女性が詩を書くこと 19 世紀フランスの詩人マルスリーヌ＝デボルド・ヴァルモールを中心に」

講演者：岡部杏子（神奈川大学非常勤講師）

開催日：2018 年 7 月 13 日

会 場：17号館 216室

本学の共通教養科目「文学Ⅰ」「文学Ⅱ」で、女性表象をテーマにフランス文学を講じている岡部杏子先生を講師に招いて、19 世紀フランスの女性詩人マルスリーヌ＝デボルド・ヴァルモールを題材に、文学創造とジェンダーの関係について考察した。

まず 19 世紀フランスにおける女性と文学の関係の概略の解説があった。スタール夫人やジョルジュ・サンドという有名な作家たちに対して、ブルストッキングを意味する「ル・バ・ブル」と称された女性たちは、貧しさや不潔さ、部屋の乱雑さという言説によって語られることが多く、それは良妻賢母というイメージを壊し、家庭の秩序を乱す存在とみなされたことによることが示された。

次に、こうした文脈との関係から、詩人デボルト＝ヴァルモールが紹介され、彼女の人生と作品をケーススタディとして、分析が行われた。恋愛・母性愛を歌い上げ、悲歌の名手といったイメージが先行するという点で、彼女の作品は当時のジェンダー規範から大きく逸脱することではなく、「ル・バ・ブル」の女性たちとは異なり、幅広く受け入れられたと論じられた。一方で、岡部氏は、政治・社会問題

を主題とした詩作品にも目を向ける。さらに実際に詩を読みつつ、政治的メッセージ性は低い、息子を暴動で失った母の苦しみなど、女の嘆きにとどまるような点があったことも強調し、彼女の作品の可能性と限界を同時に示す、繊細な読解を行った。これは近現代文学の分析にも有用となる視点であり、近代文学を中心とする本研究グループの今後の展開にも資する内容であった。

発表の合間には、他の地域での文学における女性作家の地位との比較や、女優としてのキャリアと作品の関係などで質問があり、研究会は大きな盛り上がりを見せた。

(文責 熊谷謙介)

### 3. 演 題：明清の蘇州閶門と蘇州版画

講演者：大木康（東京大学東洋文化研究所教授）

開催日：2018年7月31日

会 場：17号館 216室

本講演においては古都として名高い蘇州について蘇州版画に焦点を当てつつ論じられ、また美術作品としての側面に加えて、蘇州を社会的・文化的に読み解くツールとしての側面も蘇州版画が持つ点への指摘がなされた。

蘇州は春秋時代には既に整備され始めていた極めて歴史の古い都市であるが、とりわけ明清期には経済的な発展に伴って爛熟した文化が展開した空間でもある。背後に控える太湖、町の西側に行く京杭大運河と町の内外に縦横に張りめぐらされた運河、そして数多く造成された園林が織りなす景観は同時期の日本にも羨望をもって受容されるものであった。

講演においては、まず蘇州について古地図や文献資料を用いて蘇州城の閶門から山塘街に至る地理的状况について予備的な知識が提示されたのち、これらの地域を題材とした蘇州版画について解説が行われた。そこでは手彩色による鮮やかな色どりと西洋版画の影響を特徴としたこの版画が当時中国で販売されて広く受け入れられていただけではなく、日本にも渡って中華趣味を満たすものとして高い需要があった点についても言及がなされた。

以上の経緯を背景として蘇州版画は現在も日本各地に残されており、愛好家による収集も行われたが、そうしたコレクションの一つ海に見える杜美術館（広島県廿日市市）所蔵の蘇州版画を実見して得られた知見をもとに講演者は次の指摘も行った。まず、蘇州版画には上述の通り商品としての性格があり、とりわけ土産物としての側面は描かれた内容に影響を及ぼしている。賛に見える各地の名産品への言及や具体的な店名を伴った看板の存在は宣伝を意識したものと思えることも可能である。また、三山館（福建商人による同郷・同業組織による建物）の描写から社会に向けた自身のアピールを図る福建商人と版元・作家とのつながりも想定されることから、蘇州版画が景観をありように写し取ったものではなく、経済的・社会的背景に基づいた版元・作家の意図が込められたものとも見なしうる。

以上のように講演者は蘇州版画の持つ美術品としての価値だけではなく、明清期の蘇州社会を読み解くための素材としても有用な資料であることが論じられ、参席者にとっては蘇州版画の持つ魅力を感じ取れる得難き機会となった。

(文責 中林広一)

### 4. 演 題：冬眠するクマはなぜ寝たきりにならないのか？

講演者：宮崎充功先生（北海道医療大学リハビリテーション科学部准教授）

開催日：2018年12月18日

会 場：3号館 B103室

骨格筋は体重の約4割を占める最も大きな臓器である。骨格筋に定められた宿命は、"Use it or lose it"であると言われるように、使えば使うほど大きく（強く）なり、使わないと小さく（弱く）なっていく非常に可塑性に富んだ組織である。骨格筋は、身体を動かすパワーを発揮するだけでなく、エネルギー消費の場であり、体温調節の役割、タンパク質の貯蔵庫としての役割などをもつことから、筋肉量はQOLや生命予後に直結する。高齢化が進む現代社会において、骨格筋の可塑性が減衰することで発症する疾患である加齢性筋減弱症「サルコペニア」は非常に大きな問題であり、その機序の解明と予防法の確立が期待されている。

食物の不足や環境温低下といった過酷な冬期環境に対する生存戦略として、一部の哺乳類は冬眠をすることが知られている。驚くべきことに、約半年間もの身体不活動状態を経験するにも関わらず、冬眠動物の骨格筋量は冬眠前後でほとんど変化しない。一方で、冬眠していない活動期に筋肉の動きを制限すると、冬眠動物であっても骨格筋量は大きく減少することが知られている。つまり、冬眠動物は、冬眠期間中に誘導される何らかの生理学的応答によって筋肉が弱くなるのを防いでいると考えられる。

そこで、冬眠前後に大型の冬眠動物（ツキノワグマ）の筋肉を採取し、生化学・分子生物学的な手法を用いて、タンパク質や遺伝子の変動を解析した。その結果、筋タンパク質合成を促進する働きを持つmTOR経路が冬眠によって活性化されていること、筋量を負に制御するミオスタチン遺伝子の働きが抑制されていることが確認された。さらに、網羅的な解析を進めていくと、冬眠によって発現が有意に変動する遺伝子は100個以上も存在することが明らかとなった。もし冬眠中のクマの血液には筋萎縮を抑制する物質が含まれているならば、骨格筋培養細胞に添加した場合、細胞にはどのような変化が起こるのだろうか？ 現時点では、冬眠中に骨格筋量を維持する仕組みはまだまだ不明な点が多いが、将来的にはヒトの寝たきり防止や新たなリハビリ手法の開発に繋がっていくことが期待される。

（文責 北岡祐）

##### 5. 演 題：大西洋を渡る知識人たち——世紀転換期における「文化」論争について

講演者：貞廣真紀氏（明治学院大学文学部英文学科准教授）

開催日：2019年1月25日

会 場：17号館 216室

今回の講演会では、世紀転換期に環大西洋批評空間で生じた「文化・教養」(culture)主義がアメリカ文学史の形成にどのように影響したかを考察する。移民の増加や国際流通ネットワークの形成によって多様な文化がアメリカに流入するなかで、アメリカの知識人たちは国民が共有すべき「文化」を規定し、文化階級の固定化を試みた。その風潮の中で文学史が編纂され、古典が聖別され、文学が学問として制度化されていくことになる。しかし、同時にそれは、アーノルド的な意味での「文化」に対する不満を引き起こす契機でもあった。講演では、1880年代のマシュー・アーノルドやオスカー・ワイルドらのレクチャー・ツアーを出発点に、第一次大戦期にかけての英米の知識人の批評活動と交流を振り返り、環大西洋空間における文化意識の共有と対立がアメリカ古典文学を準備したそのダイナミズムを検証した。

（文責 古屋耕平）